

兵庫版道徳教育副読本 教師用指導書

心　ときめく（小学校５・６年）



兵庫県教育委員会

兵庫版道徳教育副読本 小学校5・6年「心ときめく」 デジタル参考資料

No.	教材名／静止画・動画URL		二次元コード	副読本 への掲載
1	「私、お医者さんになる。」 ―横山醇―			
	静止画	医師・歯科医師・薬剤師統計の概況（厚生労働省HP） https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/ishi/20/d1/R02_kekka-1.pdf		
2	未来にのこそう 私たちの浄土寺			
	静止画	国宝 浄土寺（小野市観光協会HP） https://ono-navi.jp/spot/463/		○
3	未来をつくる仕事 ―三島徳七―			
	静止画	三島博士とは（三島博士顕彰会HP） http://mishimahakase.jp/www/?page_id=22		○
	動画	〈小・中学生用〉まんが版 三島徳七ものがたり（YouTube） https://youtu.be/ENMJkV0BAC0?si=8HXJz_oYQdEFZkXm		
4	逆境からのプレーボール ―村山実―			
5	ホテルが照らす里 ―中畑町によみがえったかがやき―			
	動画	畑谷川のホテル（YouTube西脇市公式チャンネル） https://youtube.com/watch?v=HFC-z_F1138&t=73s		
6	負けへんで ―川本幸民―			
	静止画	川本幸民（三田市HP） https://www.city.sanda.lg.jp/soshiki/2/gyomu/kids/2570.html		○
	動画	受け継がれる偉人の志 ～川本幸民から学ぶまちづくり～（YouTubeチャンネル三田市） https://www.youtube.com/watch?v=bRQvNa3UaSg&t=11s		

No.	教材名／静止画・動画URL		二次元コード	副読本 への掲載
日本を愛したヒコ ―ジョセフ・ヒコ―				
7	静止画	新聞の父：ジョセフ・ヒコ（播磨町HP） https://www.town.harima.lg.jp/kyodoshiryokan/kanko/rekishi/shinbunnochichi/index.html		○
最後の指揮台 ―朝比奈隆―				
8	動画	朝比奈隆 あの人に会いたい（NHKアーカイブス） https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=D0009250138_00000		
函館で出会った人 ―工楽松右衛門―				
9	静止画	工楽松右衛門とは その功績（兵庫県高砂 工楽松右衛門公式サイト） https://matsuemon.net/deed.html		○
10 丹波市と丹波篠山市をつなぐ道 ―田艇吉―				
わが道を歩む ―池田草庵―				
11	静止画	青谿書院（養父市HP） https://www.city.yabu.hyogo.jp/soshiki/kyoikuinkai/shakaikyoiku/2_1/3/1886.html		○
甘地の獅子舞				
12	静止画	甘地の獅子舞（市川町HP） https://www.town.ichikawa.lg.jp/info/304		○
	動画	魚津市 千光寺の「小川寺の獅子舞」（NHKアーカイブス） https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0004400336_00000		
13 忘れない夏 ―嘉藤栄吉―				
樽見の大桜				
14	静止画	樽見の大桜の見学（養父市HP） https://www.city.yabu.hyogo.jp/soshiki/kyoikuinkai/shakaikyoiku/1/4/tarumi/6323.html		○
15 龍馬がのこしたもの ―坂本龍馬―				

【p 4～p 7】 「私、お医者さんになる。」 ―横山醇―

1 資料活用にあたって

- 努力に焦点をあてれば内容項目はA（5）であるが、本資料は横山醇が抱いていた大きな夢に焦点をあてて内容項目はB（7）で扱う。
- 先人の場合、努力を続けることは誰しもあることで、その努力のみ書いてある資料は、内容項目はA（5）で扱い、努力を続けることになった大きな夢が描かれている場合は、その夢で内容項目を定めると考えられる。

2 資料の読み方のポイント

- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公（醇）の生き方を貫くものを考える資料であり、醇の立場で場面を捉えていく。（子どもが「醇」になって考えられるように発問を工夫する。）
- こういう資料の場合は、様々な苦労の場面で、それを乗り越えさせる原動力になったものを考える。本資料でその原動力となったものは、相手の立場に立って苦しみを取り除きたいという思いやりの心である。
- 医者資格はあるのにもう一度東京に行ったのは、実地経験を積むことで真に患者の立場に立ちたいと願ったからであろう。
- 当時はまだ小児科の医者が存在せず大人中心の医療だったのに対して、小児のみを対象とする医療の必要性を実践的に証明した横山醇の慧眼にも注目したい。

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 「播磨が見える BanCal（バンカル）」No. 60・61・62、（財）姫路市文化国際交流財団

○ 横山醇の経歴

- ・ 1872年 兵庫懸揖西郡龍野町にて横山省三の長女として生まれる。
- ・ 1886年 同志社女学校入学。
- ・ 1892年 大阪薬学校卒業。ドイツ語と薬学を学ぶ。
- ・ 1894年 上京し済生学舎に入学。
- ・ 1896年 医師前期試験に合格。
- ・ 1897年 医師後期試験に合格。医師免許を取得。
その後、再び上京し、明治天皇の侍医であった弘田博士から指導を受け、日本で初めての小児科医となる。
- ・ 1900年 故郷の龍野で開業。その後長年にわたり地域医療に従事。
- ・ 1959年 逝去（88歳）。

○ 医学へのめざめ

- ・ 横山醇は、父省三の影響を受け、小学校卒業後、同志社女学校に入学する。醇が在校中に、同敷地内に同志社病院、京都看護婦学校も作られる。その看護婦学校に大きく関与したのが、新島襄の妻新島八重である。醇は、全寮制の同志社女学校生活の中で八重と寝食をともにするなかで大きく影響を受け、次第に、医学への道にめざめていったようであるが、裏付けとなる確かな根拠となる資料がないため、本教材ではそのことにはふれていない。

○ 地域医療に尽くした醇の姿

- ・ 「横山先生は、怖がる子どもにはできるかぎり注射をせず、寡黙な中にも非常にやさしい話し方で、診察してもらっただけで安心し、治ったような気持ちがしました。」と診察を受けた多くの人が語っている。また、子どもを診察してもらった人は、「先生にお金はいくらかと聞いたら、お金をもらうほどのことはしていない。言った通りにこの薬を子どもに飲ませるのを忘れないようにと言われた。」と語っている。
- ・ 当時は、節季ごとに患者から支払いに来るのが習わしだったが、支払うことができない患者に醇から請求することはなかった。そのことを証明するように、家族や最後の看護婦が「質素な生活だった。亡くなったときの身辺整理をしていたら箱いっぱいの請求書がでてきた」と語っている。「医は仁術なり」の信念を生涯貫き通した醇の人柄と診察態度がしのばれる。

4 展開の具体例

「私、お医者さんになる。」 ―横山醇―

- ・主 題 名 ・人のためにつくす B（7）
- ・資料の概要 ・明治の初め、女性が医師になることが困難な時代、醇は、病気で苦しむ人を救うために医者になることを決心する。上京して医学校に進学した醇は、女子学生が不当な扱いを受けながらも初心を貫くために学問に打ち込み、やっとの思いで医師免許状を手にする。ふるさと龍野に戻り、子どもたちの診療に従事する醇の表情は、やさしさに満ちていた。
- ・ね ら い ・病気で苦しんでいる人を救いたいという夢を貫いた横山醇を通して、誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にしようとする道徳的心情を育てる。
- ・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	
導 入	・学習する道徳的価値に関心を持つ。	最近、相手の立場に立って親切にしたことはありませんか。	
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。		主人公が子どもの頃から「困っている人を助けたい」という気持ちを持っていることをおさえる
	・医者になると宣言した時の主人公の気持ちを考える。	醇は、どんな思いで「わたし、お医者さんになる。」と宣言したのでしょうか。 ・病気で苦しんでいる人を救いたい。 ・医者になれば、病気に苦しむ人を治すことができる。	
	・不平不満を口にする仲間を励ます主人公の気持ちを考える。	「ここでくじけてはだめよ！」と仲間たちを励ます醇は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・私もくやしけれど、医師になる夢を捨てたくない。 ・病気で苦しむ人が私たちを待っている。	
	・再び東京に行き、実地での研修に打ち込む主人公の気持ちを考える。	医師免許状を手にした後も、なぜ醇は再び東京に行き、実地での研修に打ちこんだのでしょうか。 ・ほんとうに患者の立場に立つ医療ができる医師になりたいと思ったから。 ・まだまだ患者の経験が足りないと思ったから。	
終 末	・子どもの目を見てうれしように微笑みかける主人公の気持ちを考える。	子どもの目を見て、ただうれしように微笑みかけながら、醇はどんなことを思っていたのでしょうか。 ・病気で困っている子どもたちを自分の手で助けることができうれしい。 ・診察した子どものお母さんが心から喜んでくれることがとてもうれしい。 ・これからもみんなに安心してもらえるよう、患者さんの立場で考えることができる医者になろう。	「真に患者の立場に立ちたい」と相手の立場に立って親切にしようとする主人公の心を考えさせる。
	・感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。	

主人公が子どもの頃から「困っている人を助けたい」という気持ちを持っていることをおさえる

主人公が「困っている人を助けたい」という信念を持ち続け、困難な状況を乗り越えようとしていることをおさえる。

「真に患者の立場に立ちたい」と相手の立場に立って親切にしようとする主人公の心を考えさせる。

「困っている人のために思いやりをもって接しよう」という心情が、主人公を支え続けていることをおさえる。

【p 10～p 13】 未来にのこそう 私たちの浄土寺

1 資料活用にあたって

- 本資料は、主人公のひとみが「浄土寺は郷土の誇り」と感じることに焦点をあてて内容項目をC（17）で扱うが、神々しい光景に感動するひとみの心に焦点をあてれば、内容項目D（21）として扱うこともできる。その場合、12ページ15行目まで範読したところで、阿弥陀様の映像を使い、子どもたちにひとみと同じような美しい神々しい光景に浸らせると効果的であろう。
- 本資料は、あくまでもひとみを主人公として考える。前半部分の姉の心情に深入りしない。

2 資料の読み方のポイント

- ※ 展開の具体例は、内容項目をC（17）と想定して示している。
- 変化するのは：ひとみ（子どもが「ひとみ」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：阿弥陀堂の中の神々しい光景
- 変化するところは：「はっと息をのんだ」

3 読み物資料の素材について

【参考URL】

- ・ 国宝 浄土寺（小野市観光協会HP「おの観光ナビ」） <https://ono-navi.jp/spot/463/>

【訪れたい場所】

- ・ 国宝 浄土寺 〒675-1317 小野市浄谷町 2094 Tel 0794-62-4318
拝観時間 9:00～12:00 / 13:00～17:00（ただし10月～3月は16:00まで）

※12月31日・1月1日は堂内拝観出来ません。

- 浄土寺について
 - ・ 小野市浄谷町にある高野山真言宗の寺院、1190年～1198年の創建である。
 - ・ 開山は俊乗坊重源（しゅんじょうぼうちょうげん）、重源上人とも呼ばれる。
 - ・ 仏師快慶の大作「阿弥陀三尊像」は特に著名。
 - ・ 浄土堂は大仏様（だいぶつよう）建築。現存する大仏様建築物は浄土堂と東大寺南大門のみ。
- 俊乗坊重源について
 - ・ 平安時代末期から鎌倉時代にかけての僧（1121年～1206年）。東大寺大勧進（だいかんじん）職として源平の争乱で焼失した東大寺の復興を果たした。大勧進とは、寺院建立のために事業計画のすべてをまかされ、立案と予算の執行権をふるうことができるリーダーのこと。重源は大仏再興事業の拠点として、伊賀（三重県）、周防（山口県）など日本の7か所に東大寺の別所を造った。そのうちの播磨別所が浄土寺である。
- 浄土堂について
 - ・ 重源の採用した大仏様の代表的遺構であり、国宝に指定されている。西背面は三間すべてを蔀戸としており、西日を取り入れることを意識してある。
 - ・ 中央にある阿弥陀三尊像が雲上に立つ形態をとっており、西日を取り込むと、さながら極楽浄土から来迎した阿弥陀三尊の様子を見事に表している。
 - ・ 7月下旬から8月下旬の午後4時から5時が、浄土堂に一番よく西日が差し込み、阿弥陀三尊像と浄土堂内が美しく輝く時期である。
- 阿弥陀三尊像について
 - ・ 浄土堂中央の須弥壇（しゅみだん）に安置される、仏師快慶の代表作。巨大な三尊像で、中央の阿弥陀如来（あみだによらい）は像高5m30cm（須弥壇を含めると8m30cm）、両脇侍の観音菩薩（かんのんぼさつ）と勢至菩薩（せいしぼさつ）の像高は各々3m70cmある。
 - ・ 快慶の作品には像高3尺（約1m）の阿弥陀像が多いが、本作は珍しい大作である。3体とも立像であり、各像の立つ蓮華座の下には雲が表わされている。

4 展開の具体例

未来にのこそう わたしたちの浄土寺

- ・主 題 名 ・郷土の誇り C (17)
- ・資料の概要 ・ひとみは妊婦の姉に連れられて浄土寺を訪れたが、連れてこられた不満を口にする。けれども、この寺の歴史的価値を姉から教えてもらい、神々しい阿弥陀如来像を見て、美しさに心を奪われる。そして、生まれてくる赤ちゃんや友達に、浄土寺のすばらしさを伝えたいと感じ始める。
- ・ね ら い ・阿弥陀堂に入ってその神々しさに息をのんだひとみを通して、郷土を愛し、伝統と文化を継承しようとする道徳的心情を育てる。
- ・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・学習する道徳的価値に興味を持つ。	ふるさとの誇りは何ですか。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。	
	・浄土寺に着いた時の主人公の気持ちを考える。	「いまさら浄土寺に来て何が楽しいん?…」と言ったひとみはどんな気持ちだったのでしょうか。 ・何回も来ているお寺に行っても、おもしろくない。 ・見たいテレビがあるのに、腹が立つ。
	・お堂に入った時の主人公の気持ちを考える。	お堂に入り、はっと息をのんだひとみは、どんなことを思ったのでしょうか。 ・なんてきれいの! ・すごい!
	・初めてお堂に入った自分を恥ずかしく思っている主人公の気持ちを考える。	「ああ、私、何も…」の続きを、ひとみは心の中で何とつぶやいたのでしょうか。 ・全国的に有名ですごい建物だと分かってなかった。 ・阿弥陀様が、こんなにも美しいことを知らなかった。 ・浄土寺のすばらしさを、知ろうとしていなかった。
終 末	・振り返ってお堂を見つめる主人公の気持ちを考える。	振り返って阿弥陀様のいるお堂を見つめるひとみは、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・浄土寺はふるさとの宝物だな。 ・浄土寺のすばらしさを知ってよかった。 ・浄土寺のすばらしさをみんなに教えてあげたいな。
	・感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。

浄土寺に対して、郷土の誇りという意識が主人公にないことをおさえる。

主人公が感動し驚いている心に共感させる。

主人公は「何がわかっていなかったのか」を考えさせ、堂内の神々しい光景がきっかけとなり、「浄土寺は郷土の誇り」という意識が主人公に起こっていることをおさえる。

「郷土のすばらしい伝統文化を自分も未来に伝えていこう」という気持ちになっている主人公の心情の高まりをおさえる。

【p 20～p 25】 未来をつくる仕事 ―三島徳七―

1 資料活用にあたって

- 長文のため事前に読ませておく。
- P 22 の1行目まではプロローグなので、三島徳七が淡路の出身であること、MK鋼を作ったことについて教師が要点を説明し、22ページ2行目から発問構成する進め方もある。
- 本資料は三島が抱えている大きな夢に焦点をあてて、内容項目はA（6）で扱うが、失敗にもめげず、努力を続けてきたことに焦点をあてれば、内容項目はA（5）で扱うこともできる。
- 先人の場合、努力を続けることは誰しもあることで、その努力のみ書いてある資料は、内容項目A（5）で扱い、努力を続けることになった大きな夢が描かれている場合は、その夢で内容項目を定めると良い。

2 資料の読み方のポイント

- ※ 展開の具体例は、内容項目をA（6）と想定して示している。
- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公の生き方を貫くものを考える資料であり、三島さんの立場で場面を捉えていく。（子どもが「三島さん」になって考えられるように発問を工夫する。）
- このような資料は、様々な苦労の場面で、それを乗り越えさせる原動力になったものを考える。本資料でその原動力となったものは、真理を探究する心であり、「生活に役立つ製品を発明し、工夫して生活をよりよくしよう」という信念を貫き、理論を緻密に応用するために失敗にもめげず実験を続けた三島徳七の生き方を考えさせる。
- 「鉄もニッケルも磁石になりやすい金属なのに、この二つを混ぜたニッケル鋼は、まったく磁石にならないのはなぜか？」という疑問を大事にし、その疑問を解明する姿勢を持ち続けたことが真理の探究につながったことを児童にとらえさせる。

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 「金属工学のみちひとすじ ―三島博士三代記―」、三島顕彰会編、神戸新聞総合出版センター 2003年

【参考URL】

- ・ 十大発明家（特許庁HP内）<https://www.jpo.go.jp/introduction/rekishi/10hatsumeika.html>
- ・ 三島徳七の代表的発明（MK鋼）<https://www.jpo.go.jp/introduction/rekishi/document/10hatsumeika/10mishima.pdf>
- ・ 三島博士顕彰会 <http://mishimahakase.jp/>

○ 三島博士の研究について

- ・ 三島博士は工学博士で、東京帝国大学工学部で金属に関する研究を行い、生活に役立つ製品の開発を行っていた。資料にあるニッケルを使わない電熱線の開発は、今までより安く作ることができ、今も日本をはじめ諸外国の規格品として広く使われている。三島博士は、新しい未来をつくる研究に対して決して努力を惜しまない人であった。

○ 世界に認められたMK鋼

- ・ MK鋼の発明に対して、昭和20年帝国学士院恩賜賞、昭和25年文化勲章、昭和26年文化功労賞、昭和32年金属学会のノーベル賞といわれるアメリカのアルバート・ソーバー賞、昭和37年イタリアのルイジ・ロサーナ賞など数々の賞を受賞した。

○ 三島博士の幼少期と三島徳七博士・五色町育英基金について

- ・ 三島徳七は、決して裕福でない家庭で育ち兄弟も多かったため、中学校進学をあきらめた。しかし、三島さんは、家業（農業）を手伝いつつ、暇があると同級生から中学校の講義録などを借りて学び続けた。そんな三島さんに書生になる話がきて、十分に勉強ができるようになり、その後の三島博士が生まれた。そういった自分の幼少期をおもい、向学心に燃えている子どもに役立ててほしいという三島さんの意志を受け継ぎ、昭和50年徳七博士逝去の後、奨学金のための資金を送り、その出資金により三島徳七博士・五色町育英基金が設けられている。

4 展開の具体例

未来をつくる仕事 ―三島徳七―

- ・主 題 名 ・新しい未来を求めて A (6)
- ・資料の概要 ・三島博士は、磁石の謎を解明することで人々の役に立つ製品が生まれると信じ、助手とともに研究を始めたが、何も発見できず、助手たちに疲労と失望の色が濃くなっていく。しかし、博士は、可能性を信じ、助手たちを励まし研究を続ける。そして、真理を求める博士の強い気持ちが新しい磁石を誕生させ、博士は未知なる用途に心をときめかせる。
- ・ね ら い ・ニッケル鋼とアルミニウムの合金に磁石の可能性があることを信じて研究を続けた三島徳七の生き方を通して、真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくしようとする道徳的心情を育てる。
- ・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	磁石が身の回りのどんなものに利用されているか知っていますか。
展 開	・資料の範読を聞きながら、黙読する。 ・磁石の研究を始めた時の主人公の気持ちを考える。 ・くじけず研究を続けた主人公の気持ちを考える。 ・新しい磁石が誕生した瞬間の主人公の気持ちを考える。	未知への挑戦のような仕事を始めた三島さんは、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・新しい磁石を作れば、きっとみんなの生活に役立つぞ。 ・ぜったいに磁石を作ってやるぞ。 なぜ、三島さんは失敗してもくじけることなく研究を続けたのでしょうか。 ・必ず結果が出ると信じていたから。 ・ニッケル鋼とアルミニウムの合金には磁石の性質をもつことを確信していたから。 ・あきらめると新しい未来は生まれないと考えていたから。 大きな声を上げて研究室の仲間を見回したとき、三島さんはどんなことを考えたのでしょうか。 ・自分の考えが正しいことが証明されたぞ。 ・これで新しい未来が生まれる。 ・きっとみんなの生活がよくなるぞ。 ・みんなの喜ぶ顔が早くみたい。
終 末	・「Imagine」を読む。	副読本の25ページを読みましょう。

P22の1行目まではプロローグとして扱う。

自分の「ひらめき」を信じ、未知への挑戦を始めた主人公の真理を追求する気持ちをおさえる。

主人公が「真理を追い求めれば、必ず結果が出る」という信念を持ち続け、実験を続けようとしていることをおさえる。

「真理を追求し、新しい未来を創り出そう」という心情が主人公の探求を支えたことをおさえる。

【p 28～p 33】 逆境からのプレーボール ―村山実―

1 資料活用にあたって

- 長文のため事前に読ませておく。
- 野球のルールがわかりにくい場合は、事前に体育のベースボール型ボール運動の学習と関連させる方法もある。
- 授業では、話の流れを二つの場面に分けて取り上げる。
 - ① 試合場と玄関までの場面
 - ・ 自分の失策を人のせいにして自分を見失っている状態の一郎
 - ② 父から聞く村山さんの話の場面
 - ・ 失策をバネにして阪神のエースになった村山さん
 - ・ 負けず嫌いだけれど、自分を冷静に見る目がある村山さん
 - ・ 天才的プレーヤーの長島に脱帽できる謙虚さを持つ村山さん

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：一郎（子どもが「一郎」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：父から聞く村山さんの話
- 変化するところは：「ぼくは、今日の自分自身を思い返して、下を向いた」
- 本資料では、二種類の「負けずぎらい」が対比的に描かれている。一郎の「人のせいになっているだけの負けずぎらい」と村山さんの「悔しさをバネにしている負けずぎらい」である。
- 負けず嫌いだった村山さんだが、謙虚さがあったから「最大の失敗は、最大の幸運へのプレーボールである」と言えた。

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 「炎のエース ザトペック投法の栄光」村山実、ベースボール・マガジン社、1993年

【訪れたい場所】

- ・ 阪神甲子園球場 〒663-8152 西宮市甲子園町1-82 Tel 0798-47-1041
- ・ 甲子園歴史館 〒663-8152 西宮市甲子園町8-15 Tel 0798-49-4509

○ 天覧試合（1959年6月25日）

- ・ 天覧試合は、国民の注目イベントだった。昭和天皇、皇后が後楽園球場のバックネット裏貴賓席に来場された。日本テレビとNHKの二つの局がテレビ生中継をおこなうなど、まさに、オリンピックなみの注目度であった。
- ・ 村山実は、長嶋茂雄に打たれたサヨナラホームランを「あれは、ファールだった。」と言い続けていたという。長嶋に対するライバル意識は、この日をさかいにさらに強くなり、1500奪三振、2000奪三振を、「長嶋からとる」と宣言し、みごとに達成している。

○ 阪神・淡路大震災でのボランティア

- ・ 阪神・淡路大震災で被災した芦屋市のすべての小学校に、村山実は、救援物資として、サッカーボールのプレゼントをおこなった。震災直後のすばやい対応は、芦屋市の多くの子どもたちを喜ばせた。

○ 後輩を見守った銅像

- ・ 住友工業高等学校（現尼崎市立尼崎双星高等学校：平成23年4月に尼崎市立尼崎東高等学校と尼崎市立尼崎産業高等学校を発展的に統合）出身で、尼崎双星高等学校の前身である尼崎産業高等学校の校門には、村山実のピッチング姿の銅像があり多くの後輩を見守ってきた。

4 展開の具体例

- ・主 題 名 ・自分のよさをのばそう A (4)
- ・資料の概要 ・自分だけで野球をやっているつもりの一郎は、試合に負けたことをチームメイトの責任と決めつけ苛立つ。帰宅後、ふてくされていた一郎は、父親から村山実の天覧試合の逸話を聞くことによって、今日の自分自身を思い返し、自分のいたらなかった点に気づくとともに、前向きにがんばろうという気持ちになる。
- ・ね ら い ・失敗にくさらず前へ進んでいった村山さんの話を父から聞いて道徳的に変化する一郎を通して、自分の特徴を知って、悪いところを改めよいところを伸ばそうとする道徳的心情を育てる。

・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	
導 入	・今日の資料に興味を持つ	試合に負けてくやしい思いをしたことがありますか。	
展 開	・資料の範読を開きながら、黙読する。		すべてをチームメイトのせいにして いる主人公は、自分をみつめる意識が低いことをおさえる。
	・顔を上げずに無言でマウンドの土をならす主人公の気持ちを考える。	顔を上げずに無言でマウンドの土をならしながら、一郎はどんなことを考えていたのでしょうか。 ・お前らがエラーしたからピンチを招いたんじゃないか。 ・エラーしたお前が言うなよ。	ふてくされている主人公は、自分をみつめる意識が低いことを再度おさえる。
	・家に帰ってきて、玄関で寝そべった時の主人公の気持ちを考える。	父さんに返事もせず、くつを脱いでいる途中で玄関に寝そべった一郎は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・すごくくやしい。 ・克治さえ、エラーしなければ勝てたのに。 ・監督もみんなも自分のことをわかってくれない。	逆境時の村山さんについての父の話がきっかけとなり、自分をみつめて悪い所を改めようという意識が主人公に起こっていることをおさえる。
	・今日の自分自身を思い返して下を向いたときの一郎の気持ちを考える。	今日の自分自身を思い返して、下を向いたとき、一郎はどんなことを思っていたのでしょうか。 ・自分は人のせいばかりにしていた。 ・一つのエラーで動揺するなんて、自分はまだまだだな。 ・これまで、一人で野球をやっている気持ちになっていたな。	
終 末	・顔を上げて父さんの顔を見たときの一郎の気持ちを考える。	顔を上げて父さんを見ながら、一郎はどんなことを考えたのでしょうか。 ・人のせいにして、くさっていてもしかたないんだ。 ・人のせいにしてふてくされていたことを、みんなに謝ろう。 ・こんなことを考えているお父さんもすごいな。	「失敗にくさらず前へ進んでいった村山さんはえらいな。」という父の言葉を聞き、前向きに自分の課題を改めようという気持ちになっている主人公の心情の高まりをおさえる。
	・感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。	

【p 38～p 43】 ホタルが照らす里 一中畑町によみがえったかがやきー

1 資料活用にあたって

- 地域の復興のために力を合わせてきた人々に焦点をあてれば、内容項目はC（17）であるが、人間と自然との共存の在り方に焦点をあてれば、内容項目はD（20）となる。
- P38～P39の水害の状況とその後の町の整備は、プロローグ的に扱い、P40から授業の発問構成をする。

2 資料の読み方のポイント

- ※ 展開の具体例は、内容項目をC（17）と想定して示している。
- 変化するのは：藤原さん（子どもが「藤原さん」になって考えられるように発問を工夫する。）
- ※ 藤原さんの呼びかけでみんなも変化するが、変化の様子がわかる藤原さんを主人公にする。
- 変化するきっかけ（助言）は：井上さんのホタルを呼び戻す取り組み
- 変化するところは：「ホタルを呼び戻そうや。わたしの力で。」

3 読み物資料の素材について

【参考URL】

- ・ 畑谷川のホタル（西脇市HP内）
https://www.city.nishiwaki.lg.jp/kakukanogooannai/shichoukoushitsu/hisyokouhouka/CityPromotion/videolibrary/Scenery_Events/h29/firefly.html

【問い合わせ先】

- ・ 「ふるさとホタルまつり」に関する情報
西脇市市長公室秘書広報課（広報担当） Tel 0795-22-3111(代表)
- 台風10号（1983年9月）の水害について
 - ・ 台風10号の接近により活発化した秋雨前線は、9月28日には早朝から強雨をもたらし、県内では河川のはん濫、山・がけ崩れが多発した。
 - ・ 本資料の舞台である西脇市にも多量の雨をもたらし、住宅全壊4戸、住宅半壊16戸、床上浸水335戸、田畑流出223箇所、がけ崩れ26箇所、流出橋梁2箇所などの被害をもたらした。
- ふるさとホタルまつりについて
 - ・ 中畑町の住民の故郷を思う気持ちの象徴がホタルであるといえる。台風10号による水害から6年後の1989年に第1回が開催されて以来、町をあげてホタルの飼育、環境保全に努め、2016年まで毎年になぎやかに「ふるさとホタルまつり」が開催されていた。
- ホタル復活への人々の思いについて
 - ・ ホタルは全くの清流には出現しない。幼虫のえさとなる川ニナが育つ環境でなければ、生育できないからである。そのため、本資料にあるように、玉ねぎなど具のたくさん入った味噌汁を布袋に入れて川に沈めるといった、地道な作業を地域の人々が続けた。
 - ・ また、豊中市下水道局をはじめ、数か所の先進地へ出かけて指導を受けるなど、ホタルをふるさとに復活させる取組を続けた。更に工事に際しては、約10メートル間隔にミニ井堰を設置するとともに、幼虫の隠れ家となる流石を配置するといった設計変更まで行われた。ここにも、中畑町の人々のホタルに対する強い思いを伺い知ることができる。

（地域の方々への聞き取り及び「西脇市地域防災計画」から）

4 展開の具体例

- ・主 題 名 ・ふるさとへの思い C (17)
- ・資料の概要 ・台風による水害の復旧により、ふるさとの川や水路がコンクリートで固められた姿を見た藤原さんは、安心する一方で自然が失われたことにももの足りなさを感じる。そんな時、井上さんの地道な取組を知り、ホタルを呼び戻す活動をみんなに呼びかけて行動を始め。数年後、ふるさとの水路に戻ったホタルを感慨深げに藤原さんは見つめる。
- ・ね ら い ・井上さんのホタルを呼び戻す取組をみて、もう一度中畑町の町にホタルを飛ばそうと努力する藤原さんと町の人々を通して、先人の努力を知り郷土を愛する道徳的实践意欲を育てる。
- ・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される生徒の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	副読本P43の写真(ホタルのイメージ)を見ましょう。
展 開	・資料の範読を聞きながら、黙読する。	
	・修理された川の様子を見た時の主人公の気持ちを考える。	新しい川や水路のほとんどがコンクリートで固められた姿を見た藤原さんは、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・川も安全になり、水害の心配もなくなったな。 ・何かもの足りないな。 ・ふるさとらしさがなくなって寂しいな。
	・ホタルを呼び戻す活動をみんなに呼びかける主人公の気持ちを考える。	「ホタルを呼びもどそうや。わしらの力で。」と呼びかける藤原さんはどんな思いだったのでしょうか。 ・何かしないとふるさとに元気をとりもどせないぞ。 ・これなら、みんなで一緒にできるぞ。 ・みんなで協力すればできるぞ。
	・ふるさとの水路にホタルが戻った様子を見た時の主人公の気持ちを考える。	水面にゆれるホタルの光を目で追いながら、藤原さんにはどんな思いがこみ上げているのでしょうか。 ・ホタルがもどってきてくれてうれしい。 ・みんなの力でふるさとの自然を取り戻したんだ。 ・ふるさとのみんなも喜んでくれるだろう。
	・「ふるさとホタルまつり」でホタルの光をながめる主人公の気持ちを考える。	「ふるさとホタルまつり」で子ども達の元気な声を聞きながらホタルの光をながめる藤原さんは、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・この子たちが大人になっても、ホタルが飛び交うふるさとであってほしい。 ・この子たちのためにも、自然豊かなふるさと守らなければいけないな。 ・子供たちに、ふるさとのすばらしさを伝えていこう。
終 末	・感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。

主人公に「愛する郷土を何とかしたい」という意識が起こっていることをおさえる。

井上さんがホタルを呼び戻す取組をしている話がきっかけとなり、主人公の「愛する郷土を何とかしたい」という意識が高まっていることをおさえる。

みんなの努力が実り、愛する郷土の豊かな自然を取り戻すことができたことに感激している主人公の心に共感させる。

ホタルの光をながめる主人公が、「ふるさとのよさを次の世代に継承していかなくは」という実践意欲を強めていることをおさえる。

【p 46～p 49】 負けへんで ―川本幸民―

1 資料活用にあたって

- 46ページ11行目～47ページ3行目までは、川本幸民の業績について教師が要点を説明し、46ページ4行目から発問構成する進め方もある。
- 川本幸民の探求心に焦点をあてれば内容項目はA（6）であるが、蘭学を通してすでに様々な知識を得ていた幸民が、日本人の一人として「西洋に負けるものか」という気持ちを支えにして研究に取り組んだことに焦点をあてて内容項目はC（17）で扱う。
- 内容項目C（17）における愛国心の扱いについては、郷土を愛する心が日本全体に開かれたものへと発展し、国を愛する心が児童の内面から自覚されることが大切である。したがって、幸民は西洋に対抗意識はもっていたが、排他的な考えで競争しようとしていたのではなく、西洋と比較しながら自国の学術・研究レベルを向上させ、日本人に自信をもたせようとしていたことに着目させることが大切である。

2 資料の読み方のポイント

- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公（幸民）の生き方を貫くものを考える資料であり、幸民の立場で場面を捉えていく。（子どもが「幸民」になって考えられるように発問を工夫する。）
- このような資料は、様々な苦労の場面で、それを乗り越えさせる原動力になったものを考える。本資料では、藩主隆国の言葉を励みとして「日本人の一人として西洋に負けるか」と、学問・研究に取り組み、ペリーがビールをふるまったことに対抗意識を燃やしてビール作りに苦心した、日本を愛する幸民の生き方について考えさせる。

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 『黒船なにをするものぞ ―蘭学者 川本幸民―』 柳田昭、朝日ソノラマ、1998年
- ・ 『蘭学者 川本幸民』 司亮一、神戸新聞総合出版センター、2004年
- ・ 『川本幸民の遠征奇器術解説』 足立元之、NPO歴史文化財ネットワークさんだ、2010年
- ・ ふるさと読本1『川本幸民物語』 高田義久、三田市、2008年
- ・ さんだ人物誌1『川本幸民』 高田義久、2008年

【資料の展示】

- ・ 歴史資料収蔵センター 〒669-1532 三田市屋敷町12-27 TEL 079-562-7233
- ・ 三田ふるさと学習館 〒669-1532 三田市屋敷町7-33 TEL 079-563-5587

○ 川本幸民について

- ・ 川本幸民は日本で初めてビール醸造に成功した。その復刻版が生誕200年にあたる2010年に初めて販売された。当時のように試飲会も催された。また、「化学」という言葉を作った幸民の業績に続こうと「川本幸民につづけ！さんだ子ども科学教室」も行われている。
- ・ 幸民の口癖は「英才は彊力（彊力）勉励の別名なり」だった。知的好奇心が強く、書物上だけで知識でなく、実際に作ったり実験したりする強い探求心の持ち主で、学ぶことを惜しまなかった。
- ・ 幸民は有名な蘭学者坪井信道に入門、医学や化学、物理学などを学んだ。同期には、生涯の友であり適塾を作った緒方洪庵がいる。幸民は1857年、薩摩藩に召し抱えられ、薩摩藩の武士に学問を教えたり、多くの本の翻訳をしたりした。島津斉彬は幸民の知識を高く評価し信頼もしていた。学者としても名声を得た幸民は、46歳で幕府の洋学研究教育機関「蕃所 調所」に教授手伝いとして迎えられ、後に教授に昇進した。幕府が崩壊すると、江戸から三田に帰郷し、息子の清次郎とともに英蘭塾を開き、自分の身に付けてきた知識を広げた。
- ・ 幸民は自分が研究し翻訳した本を出版することで、人々に西洋の最新の学問や道具を紹介した。特に「遠生奇器述」で写真機・マッチ・蒸気機関車・蒸気船・電信機などの事を図入りで説明した。

4 展開の具体例

- ・主 題 名 国を思う心 C (17)
- ・資料の概要 幸民は、藩主九鬼隆国の言葉を励みに「日本人の一人として西洋に負けるものか」という決意で学問・研究に取り組む。ペリーが来航した際にビールをふるまったことを耳にして対抗意識をもった幸民は、苦心してビールを完成させ、盛大な試飲会を開く。幸民は、愉快にビールのお話をしている江戸の人々をいつになく優しい目で見つめるのであった。
- ・ね ら い ビール作りを通して、外国にできるものは日本にもできることを証明した幸民の生き方を通して、郷土やわが国の発展に尽くした先人の努力を知り、それを継承発展させていく自覚を持ち、郷土や国を愛する道徳的心情を育てる。
- ・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	「負けへんで」と思って何かに取り組んだことはありますか。
展 開	・資料の範読を聞きながら、黙読する。 ・藩主から国のために学問に励むよう言われた時の主人公の気持ちを考える。 ・自分もビールを作ろうと思い立った主人公の気持ちを考える。 ・ビールのことを話題にしている人々を見た時の主人公の気持ちを考える。	藩主隆国から「この国のために学問に敢然といどめ」と言われた幸民は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・隆国様のありがたい言葉に報いるようがんばろう。 ・西洋の学問に追いつき、日本の学問のすごさを見せてやるぞ。 ・西洋に負けるものか。 幸民が「よし、自分もつくってやろう!」と思い立ったのは、なぜでしょう。 ・西洋人に作れて日本人に作れないわけがないと思ったから。 ・うまい飲み物を作って、「西洋にはかなわない」というみんなの気持ちを打ち消してやろうと思ったから。 ・日本の人に自信を取り戻してほしいと思ったから。 愉快にビールのお話をしている江戸の人々をやさしい目で見つめる幸民は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・みんなに喜んでもらえてよかった。 ・日本人もやれば西洋に追いつけることをわかってもらえた。 ・隆国様の言われた「この国のために敢然と挑む」ことができた。
終 末	・感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。

藩主隆国の言葉がきっかけとなり、「日本の国のために」という意識が主人公に起こっていることをおさえる。

ペリーがビールを振る舞った話を耳にしたことがきっかけとなり、「日本のために」という意識が高まり、主人公が「ペリーに負けへんで」という気持ちでビールづくりに取り組んだことをおさえる。

「日本の国の発展のために力をつくしたい」という心情が主人公の研究を支えたことをおさえる。

【p 56～p 61】 日本を愛したヒコ ―ジョセフ・ヒコ―

1 資料活用にあたって

- 長文のため事前に読ませておく。
- 使用する学年段階に応じて、幕末の時代について教師が簡単に説明する。
- 56ページ～57ページは、漂流したジョセフ・ヒコがアメリカ国籍を得て、九年ぶりに故国の土を踏むまでの経緯について教師が要点を説明し、58ページから発問構成する進め方もある。
- 内容項目C（17）における愛国心の扱いについては、郷土を愛する心が日本全体に開かれたものへと発展し、国を愛する心が児童の内面から自覚されることが大切である。したがって、アメリカ国民となって生きることを選んだヒコであったが、久しぶりに日本にもどり、ふるさととしての故国日本の現状と将来を案ずるようになったことをおさえることが大切である。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：ヒコ（子どもが「ヒコ」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：九年ぶりに見た日本の社会の様子
- 変化するところは：「きっとまた、ここにもどってくる…」

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 『ジョセフ彦 海外新聞』早稲田大学図書館資料叢書 2 早稲田大学出版部
 - ・ 『人物草書 ジョセフ・ヒコ』吉川弘文館 近盛晴嘉
 - ・ 『絵ものがたり ジョセフ・ヒコと洋式帆船の男たち』播磨町ふるさとの先覚者顕彰会
- ジョセフ・ヒコの生い立ちと業績

- ・ 1837年 幼名を彦太郎といい、現加古郡播磨町に生まれた。
- ・ 1850年 13歳のとき、大阪から江戸に向かう途中に乗りかえた栄力丸が江戸からの帰途、遠州灘沖で遭難した。太平洋を漂流中、アメリカの商船に救助され渡米。税関長サンダースとの出会いにより、サンフランシスコで教育を受けることになった。また、アメリカ各地をまわる機会を得るとともにワシントンではピアース大統領と会見する。
- ・ 1854年 カトリックの洗礼を受け、「ジョセフ・ヒコ」と改名。その後アメリカに帰化した。アメリカの市民権を獲得した最初の日本人だった。
- ・ 1859年 アメリカ神奈川領事館通訳として帰国。日米修好条約の実施や幕末の遣米使節派遣など21歳のヒコは幕末外交の第一線で活躍した。
- ・ 1861年 三度アメリカに渡る。当時のアメリカは南北戦争の最中であつた。ヒコはリンカーン大統領と会見して、民主主義・民主政治を体得した。そして、新聞の威力を知った。
- ・ 1864年 「新聞誌」のちの「海外新聞」を発刊。「新聞の父」と呼ばれている。新聞は、新生の胎動を続ける日本に海外の情報や知識をもたらした。民間人による日本最初の新聞であり、現在発行している新聞の原型となった。その後、幕末から維新にかけた激動の日本で、活動を続けた。
- ・ 1897年 東京で生涯を閉じた。東京の外人墓地には「浄世夫彦之墓」と刻まれた墓碑が建っている。

4 展開の具体例

日本を愛したヒコ —ジョセフ・ヒコ—

- ・主 題 名 ・日本のために C (17)
- ・資料の概要 ・漂流後アメリカに渡ったヒコ（彦蔵）は、九年ぶりに故国の土を踏むが、世界に残されそうな開国後の日本社会を目の当たりにして、故国の行く末を憂う。アメリカに戻った後、新聞を読みふける人々を見たヒコは、日本を目覚めさせるために新聞発行を決意する。ようやく発行した新聞を読む人々を見て、ヒコの全身に熱い思いが込み上げる。
- ・ね ら い ・日本を生まれ変わらせようと新聞発行をはじめたヒコを通して、わが国の発展に尽くした先人の努力を知り、国を愛する道徳的心情を育てる。
- ・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	新聞にはどんな利点がありますか。	
展 開	・資料の範読を聞きながら、黙読する。		資料の時代背景（開国後の混乱）を押さえ、主人公が故国の行く末を憂う状況をつかませる。
	・日本を再度訪れることを決意した主人公の気持ちを考える。	「きっとまた、ここにもどってくる……。」と言いながら、ヒコはどんなことを考えたのでしょうか。 ・このままでは日本は世界から取り残されてしまう。 ・この国をなんとかしなければならぬ。 ・きっとまた、ここに帰って、日本を何とかしたい。	久しぶりに見た日本の社会の様子がきっかけとなり、「この国を何とかしなければ」という意識が主人公に起こっていることをおさえる。
	・アメリカで新聞を読みふける人々の姿に見入る主人公の気持ちを考える。	アメリカで新聞を読みふける人々の姿に見入るヒコは、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・新聞があれば、誰もが世界中のことを知ることができるぞ。 ・新聞の力で日本を目覚めさせることができるぞ。 ・日本のために新聞を発行したい。	新聞を読みふける人々の姿がきっかけとなり、主人公の国を思う気持ちが高まっていることをおさえる。
	・新聞を読む人たちの姿を目にした主人公の気持ちを考える。	「海外新聞」を読む人たちの姿を見て、ヒコの全身にこみ上げてきた熱いものは何だったのでしょうか。 ・日本人も世界の出来事を知ることができるという感動 ・これで日本を目覚めさせることができるという安心感 ・きっと、日本は変わるにちがいないという自信	「故国の発展のために力をつくしたい」という心情が主人公を支えたことをおさえる。
終 末	・自分の考えを書く。	自分の考えを道徳ノートに書きましょう。	

【p 64～ p 67】 最後の指揮台 ―朝比奈隆―

1 資料活用にあたって

- オーケストラの説明については、事前に音楽の鑑賞の学習と関連させる方法もある。
- 朝比奈隆の生き方を支えた「プロ指揮者としての自覚、仕事場としての舞台」に焦点をあてるならば内容項目はC（14）として扱い、「より高い目標を立てて、理想に向かって前進していこうとする」朝比奈の姿に焦点をあてるならば、内容項目はA（5）で扱う。

2 資料の読み方のポイント

※ 展開の具体例は、内容項目をC（14）を想定して示している。

- 主人公の変化を問う資料ではなく、コンサートマスターの主人公（私）を通して朝比奈隆の生き方を貫くものを考える資料であり、朝比奈隆の生き方を見つめているコンサートマスターの「私」の立場で場面を捉えていく。（子どもが「私」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 場面は「楽屋」「演奏会舞台」「回想」から成り、時系列で整理すると次のようになる。
 - ・時系列①：P 6 6 の 1 行目～1 7 行目 回想の場面
 - ・時系列②：P 6 4 の 1 1 行目～P 6 5 の 2 0 行目 演奏会舞台（演奏前半）の場面
 - ・時系列③：P 6 4 の 1 行目～9 行目 演奏前半終了後の楽屋の場面
 - ・時系列④：P 6 6 の 1 9 行目～P 6 7 の 1 4 行目 演奏会舞台（演奏後半）の場面

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 「オーケストラ、それは我なり～朝比奈隆 四つの試練～」、中丸美繪、文藝春秋、2008年
- ・ 「朝比奈隆のすべて～指揮生活60年の軌跡～」、朝比奈隆他、芸術現代社、1997年
- ・ 「朝比奈隆～長生きこそ、最高の芸術～」、木之下 晃、岩野 裕一、新潮社、2002年
- 朝比奈隆について
 - ・ 朝比奈氏は大阪フィルハーモニー交響楽団（通称：大フィル）の常任指揮者から音楽総監督となり、一つのオーケストラのトップ指揮者を54年間務めていた大指揮者。神戸市名誉市民顕彰や文化勲章を受章している。
 - ・ 1908年生まれ。関東大震災で焼け出された後、祖母から焼け残りの中古のバイオリンを買い与えられたことから、音楽に興味を示すようになった。その後、京都帝国大学（京都大学）法学部に入学し、ビオラ、バイオリンを担当した後、指揮をメッテル氏から学んだ。初めて指揮者としてステージに立つ事が決まり、メッテル氏を訪ねた時、「何十人ものプレーヤーをまとめる人間が人に教わるとは何事だ。自分でしっかりと考えなさい。」と家にもいれてもらえなかったが、演奏を聴いた後、「短く言えば、朝比奈さん、バンザイです。」と称賛されたというエピソードが残っている。また、「一日でも長く生きて、一回でも多く舞台に立て」というのも、メッテル氏の言葉である。卒業後、音楽の道にまっすぐ進むのではなく、阪神急行電鉄（阪急電車）に勤務。電車の運転手や車掌やデパートに勤めていたエピソードも興味深い。
 - ・ 指揮者デビューは、1940年。翌年に結婚し、神戸市灘区に住み始めた。指揮者としての足跡は、世界的に有名である。年末によく演奏される「ベートーヴェン交響曲第9番」は251回も指揮をしている。交響楽団のメンバーからは「オッサン」と親しみをこめて呼ばれ、人間味あふれる面があった。朝比奈氏の曲の解釈、魅力あふれる人間性に思いを寄せる人も多く、演奏会の人気が高く、チケットが即完売となることもよくあった。
 - ・ 本資料でとり上げた2001年10月24日の演奏会が、最後の舞台となった。演奏会后、体の不調を訴えて、入院。同年12月29日に、生涯現役のまま93歳で亡くなった。

4 展開の具体例

最後の指揮台 —朝比奈隆—

- ・主 題 名 一つの仕事にかけた姿 C (14)
- ・資料の概要
 - ・93歳の指揮者朝比奈隆が体調のすぐれないなか舞台に立つ。コンサートマスターである「私」は体調を気づかいながらも、真摯に音楽に向き合う朝比奈の姿に感動し、日頃からプロとしての高い意識を持ってスコアの勉強や練習にのぞむ朝比奈の姿を想起する。演奏後、指揮台に駆け寄る「私」であったが、そこにはいつも通り背筋をぴんと伸ばし観客の拍手に笑顔で応える朝比奈先生の姿があった。
- ・ね ら い
 - ・作曲家、朝比奈の姿に感動する「私」を通して、一つの仕事に取り組む意義を理解し、働くことを通して社会に役立とうとする道徳的心情を育てる。

・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	オーケストラの指揮者はどんな仕事をする人でしょう。
展 開	・資料の範読を聞きながら、黙読する。 (演奏会舞台上)	
	・指揮台に向かう朝比奈先生の姿を見た時の主人公の気持ちを考える。 (回想場面)	一步一步ゆっくりと指揮台に向かう朝比奈先生を見た私は、どんなことを考えたのでしょうか。 ・生涯をかけた仕事場に向かう姿は、いつも緊張感があるな。 ・先生、お客様のために今日も素晴らしい演奏をしましょう。 ・先生のこの姿をいつまで見ることができるのだろう…。
	・スコアから新しい発見をする朝比奈先生の姿に触れた主人公の気持ちを考える。 (演奏会舞台上)	「毎回同じでも、それが新しい発見なんだよ…」という朝比奈先生の言葉を聞いた私は、どんなことを思ったのでしょうか。 ・九十才をすぎているのにすごい気力だ。 ・自分の仕事に毎回真剣勝負で指揮にのぞむ姿は、プロの鏡だ。 ・私も同じプロとして、この姿勢を見習いたい。
	・朝比奈先生の姿が涙でかすんでいる主人公の気持ちを考える。	朝比奈先生の姿がなみだでかすんだ私は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・先生、チャイコフスキーの魂が伝わる演奏でしたよ。 ・死力を尽くして演奏をやり遂げられたんですね。 ・先生、もうこれで十分でしょう。
終 末	・観客の拍手に応える朝比奈先生の姿を見た主人公の心を考えさせる。	「これなのだ…」とつぶやきながら、私はどんなことを思ったのでしょうか。 ・これなのだ、本当のプロのすごさは。 ・これなのだ、生涯をかけて仕事に取り組む人間のすばらしさは。 ・これなのだ、先生が一番大切にされているのは、お客様なのだ。 ・これなのだ、妥協のない仕事とは。
	・自分の考えを書く。	自分の考えを道徳ノートに書きましょう。

「休憩中の楽屋」「回想」「演奏会舞台」の場面の種類と時系列を確認させておく。

指揮台に向かう朝比奈先生を心配するとともに、舞台にかけのプロの意識を主人公が感じていることをおさえる。

朝比奈先生が曲に向き合う真摯な姿から、プロの意識を主人公が感じていることを再度おさえる。

体力、気力の限りを尽くして指揮を終えた朝比奈先生を主人公が感無量で見ていることをおさえる。

演奏後も凛とした姿を見せる朝比奈先生の姿を見て、仕事に取り組むことの厳しさとすばらしさを感じている主人公の心情をおさえる。

【p 70～p 75】 函館で出会った人 ―工楽松右衛門―

1 資料活用にあたって

- 長文のため事前に読ませておく。
- 高田屋嘉兵衛の業績を紹介し、P 71の15行目の磯部さんが言った「半分」の意味を教師が説明する。
- 本資料では、工楽松右衛門の生き方を通して働くことの意義を考えさせる。内容項目C（14）については、勤労が自分のためだけではなく、社会生活を支えるものであることを理解し、社会への奉仕活動など公共のために役立つ活動に目を向け、積極的に取り組むことができるようにすることが大切である。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：雄太（子どもが「雄太」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：磯部さんが語る帆布を独りじめしなかった松右衛門についての話
- 変化するところは：「えっ！」雄太はおどろいた。そして感心した。

3 読み物資料の素材について

【参考URL】

- ・ 兵庫県高砂 工楽松右衛門公式サイト
<https://matsuemon.net/deed.html>
- ・ 海拓者たち 日本海洋偉人列伝（一般社団法人 日本埋立浚渫協会HP内）
<https://www.umeshunkyo.or.jp/marinevoice21/kaitakusya/259/index.html>

○ 工楽松右衛門について

- ・ 1743年（寛保3） 播磨の国高砂（現在の高砂市）の船乗り・宮本松右衛門の長男として生まれる。
- ・ 1758年（宝暦8） この頃、兵庫に出て佐比絵町にある御影屋という船主のもと、船乗りとなる。その後、兵庫の廻船問屋北風荘右衛門に知遇を得て、その斡旋で佐比絵町に店を構え、船持船頭として独立する。
- ・ 1785年（天明5） 従来の破損しやすい脆弱な帆に代わり、木綿を使った厚手大幅物の帆布の織り上げに成功。「松右衛門帆」として全国的に普及。この「松右衛門帆」の考案により、航海術が飛躍的に向上し、結果として北前船の北方領土進出が現実的となった。
- ・ 1790年（寛政2） 幕府より、択捉島での埠頭建設の命令が下る。同年5月、自前の船に資材を積み込み、択捉島へ出発。
- ・ 1791年（寛政3） この年の夏、択捉島での埠頭建設竣工。
- ・ 1802年（享和2） 幕府より、「工夫を楽しむ」の意から、「工楽」の姓を賜る。
- ・ 1804年（文化元） 函館にドックを築造。その後、択捉開発や蝦夷地交易に使った函館の地所を、高田屋嘉平に譲る。
- ・ 1812年（文化9） 70年の生涯を終える。墓所は現在の神戸市兵庫区にある。

- ・ 松右衛門は42歳の時に、従来の和船に用いられてきた藁を編んだむしろや2～3枚の綿布を重ねて紡いだものに代わり、木綿の細糸をより合わせた太糸を使い、厚手の一枚布を織り上げる方法を考案。この新しい布は、耐久性に優れ軽く扱いやすいことから瞬く間に全国に普及し、「松右衛門帆」と呼ばれるようになった。現在の帆布にも受け継がれる、すだれ織りの誕生である。また松右衛門は、新巻鮭を保存食として考案した人としても知られる。

4 展開の具体例

函館で出会った人 ―工楽松右衛門―

- ・主 題 名 ・社会に役立つ仕事 C (14)
- ・資料の概要 ・母たちと訪れた函館で、タクシー運転手から「函館の恩人」として函館港を開いた工楽松右衛門の名前を聞かされ、高田屋嘉兵衛のことが頭に浮かんだ雄太は当惑する。運転手から、工楽の仕事として帆布等の発明も教えてもらったが、「お金が目的なのでは」と考えてしまう。しかし、運転手から、工楽が帆布の技術を独り占めしなかったことを聞かされた雄太は、世のため人のために仕事に取り組んだ工楽の姿を思い浮かべる。
- ・ね ら い ・磯部さんが語る帆布を独り占めしなかった工楽松右衛門についての話を聞いて道徳的に変化する雄太を通して、働くことの意義を理解し、公共のために役立とうとする道徳的实践意欲を育てる。

・展開の概要

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	函館の場所を地図帳で確かめましょう。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・函館の港を実際につくったのが工楽であることを聞かされた主人公の気持ちを考える。 ・あら巻サケや松右衛門帆の業績について聞かされた主人公の気持ちを考える。 ・工楽が帆の技術を独り占めしなかったことを聞かされた主人公の気持ちを考える。 ・眼下に広がる函館の港を見ながら工楽のことを思う主人公の気持ちを考える。	運転手の磯部さんの説明に「ふうん…」言いながらうなづく雄太は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・工楽さんはたいした人かもしれないが、仕事は頼まれてやってただけではないのか。 ・函館の恩人なんていうのは大げさだ。 雄太は、どんなことを思いながら「きっと大金持ちになったんでしょ」と言ったのでしょうか。 ・すごい発明をしたかもしれないけれど、お金儲けのためにやったんだろう。 ・工楽さんも、お金儲けのために、自分の財産を増やしたり名誉を得るために仕事に打ち込んだのだろう。 「えっ！」と声をあげた時、雄太はどんな気持ちだったのでしょうか。 ・大儲けができるチャンスだったのに、おどろきだ。 ・一人で儲けることよりも、みんなのことを考えるなんてすごい人だな。 ・「大金持ち」なんて言って悪かったな。 「世のため、人のため、か……」とつぶやきながら、雄太はどんなことを考えていたのでしょうか。 ・世のため、人のために働くってかっこいいな。 ・函館の人が「恩人」と思う気持ちがわかるような気がする。 ・自分のためだけでなく、みんなを支えるために働く気持ちが大切にしよう。
終 末	・自分の考えを書く。	自分の考えを道徳ノートに書きましょう。

高田屋嘉兵衛の業績を紹介し、P71の「半分」の意味をつかませておく。

高田屋嘉兵衛ではないと言われた主人公が、反発の気持ちで素直に納得できないことをおさえる。

主人公が、素直に納得できないのは、まだ反発を感じているとともに、「仕事はお金儲けの手段」という意識を主人公が持っているためであることをおさえる。

工楽松右衛門が帆の技術を独り占めしなかったことを知り、驚き、感心している主人公の心に共感させる。

磯部さんの「世のため、人のため」という言葉をきっかけとして、主人公が「社会に役立つために働こう」という実践意欲を強めていることをおさえる。

【p 80～p 85】丹波市と丹波篠山市をつなぐ道 ―田艇吉―

1 資料活用にあたって

- 丹波市・丹波篠山市の位置を確認する。
- 長文のため事前に読ませておく。
- 資料文頭と文末のアスタリスク（***）の前後は、プロローグ、エピローグとして扱い、80ページの12行目～84ページ15行目で発問構成する。
- 努力に焦点をあてれば内容項目はA（5）であるが、本資料は田艇吉が抱いていた大きな夢に焦点をあてて内容項目はC（17）で扱う。
- 先人の場合、努力を続けることは誰しもあることで、その努力のみ書いてある資料は、内容項目はA（5）で扱い、努力を続けることになった大きな夢が描かれている場合は、その夢で内容項目を定めるとよい。

2 資料の読み方のポイント

- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公（艇吉）の生き方を貫くものを考える資料であり、艇吉の立場で場面を捉えていく。（子どもが「艇吉」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 本資料では、「郷土の発展のために鐘ヶ坂峠を整備しなければ」という郷土愛に支えられた信念を貫き、周囲の理解がなかなか得られないなど多くの苦労を克服しながら、トンネルの完成をさせた艇吉の生き方を考えさせる

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 田艇吉翁寿像記念帖 松井孝禎編 同建設委員会 1939年
- ・ わたしたちの丹波市 丹波市小学校社会科副読本編集委員会 丹波市

○ 田艇吉について

- ・ 艇吉は、郷土の発展のため、交通網の整備に重きを置いた。鐘ヶ坂隧道の他にも、現在のJR福知山線の前身となる阪神地方から丹波市を通過、舞鶴へ通じる阪鶴鉄道株式会社を起こした。現在、JR柏原駅前に氏の功績をたたえた銅像が建立されている。

1852年（嘉永5年）	丹波国氷上郡柏原藩領の下小倉村（現在の丹波市柏原町下小倉）に田文平の長男として生まれる。
1864年（元治元年）	12歳 儒学者の小島省齋に入門
1870年（明治3年）	19歳 村総代として活躍
1879年（明治12年）	28歳 第一期県会議員に当選後、氷上郡書記、氷上郡長などを歴任
1891年（明治24年）	40歳 衆議院議員となる（当選4回）
1899年（明治32年）	48歳 阪鶴鉄道株式会社取締役社長に就任 帝国電灯、柏原合同銀行などを設立
1938年（昭和13年）	87歳 死去

○ 鐘ヶ坂峠について

- ・ 鐘ヶ坂峠は、艇吉が予見したとおり現在の丹波市、丹波篠山市の交通の要所であった。それは、昭和、平成と次々にトンネルが整備されたことで明らかである。同じ峠に明治・昭和・平成に整備された3本のトンネルがあるところは、全国でも珍しい。明治のトンネル完成を記念して植えられた桜も、毎年春には見事に咲き誇り、今では丹波吉野として観光の名所となっている。
- ・ 鐘ヶ坂隧道は、煉瓦積み工法のトンネルとしては、日本最古で（現存する道路トンネルとしても日本で5番目の古さ）である。昭和のトンネルが開通したため閉鎖されたが、現在は、鐘ヶ坂公園で行われる桜祭りやもみじ祭などのイベントの際に開放されている。

4 展開の具体例

- ・主 題 名 郷土の発展を願って C (17)
- ・資料の概要 現在の丹波市と丹波篠山市の交流を阻む最大の難所であった鐘ヶ坂峠。艇吉は人々の安全と郷土の発展のため峠の整備を提案するが、人々の理解がなかなか得られない。そんな状況でも、艇吉は整備の必要性を村の人々に訴え続ける。ようやく、艇吉の考えが理解されるようになり、郷土の未来のために語り合う人々の姿が見られるようになる。
- ・ね ら い 鐘ヶ坂峠の整備が村に必要なだという信念を貫き通した田艇吉の姿を通して、先人の努力を知り、郷土を愛する道徳的心情を育てる。
- ・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	
導 入	・学習する道徳的価値に興味を持つ。	郷土の発展を願ってつくられたものを探しましょう。	
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。		社会科で学習した丹波地域の場所を復習しておく。
	・峠をすべっていく馬力を見たときの主人公の気持ちを考える。	艇吉はすべっていく馬力を見ながらどんなことを考えていたのでしょうか。 ・峠を安全に行き来できるように整備できないか。 ・この地域を発展させるためには何とかしなければ…。	主人公に「郷土のために何とかしなければ」という気持ちが起こっていることをおさえる。
	・村人たちに理解されない主人公の気持ちを考える。	場の雰囲気が一気に冷めていく中、黙るしかなかった艇吉は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・工事が必要性を分かってもらえないことがくやしい。 ・地域のためにみんなで力を合わせたいのに…。 ・みんなが資金のことを心配するのも仕方がないが…。	郷土のためにみんなで力を合わせることができず、くやしい思いをしている主人公の心を考えさせる。
	・ことあるごとに峠の話を書き続けた主人公の気持ちを考える。	寄り合いで反対された後も、なぜ艇吉はことあるごとに峠の整備の必要性を書き続けたのでしょうか。 ・あきらめたら子や孫に申し訳が立たないから。 ・郷土の将来のために何とかしなければと思ったから。 ・峠だけではなく二つの村も時代から取り残されると考えたから。 ・このままでは、この地域がすたれてしまうと思ったから。	主人公が「峠の整備は郷土のためになる」という信念を持ち続け、必要性を訴えていることをおさえる。
終 末	・未来のために語り合う皆の姿を見たときの主人公の気持ちを考える。	語り合うみんなの姿を大きくうなずきながら見つめる艇吉は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・これで峠の整備が進み、この地域は発展するぞ。 ・峠を挟んだ両地域の未来が楽しみだ。 ・郷土を愛するみんなの思いが一つになれば大丈夫だ。	「愛する郷土を何とか発展させたい」という心情が主人公の行動を支えたことをおさえる。
	・自分の考えを書く。	考えたことを道徳ノートに書きましょう。	

【p 92～p 95】 わが道を歩む ―池田草庵―

1 資料活用にあたって

- 本資料では、苦悩の末、和尚の許しを得ないまま寺を出て自ら選んだ儒学の学問に励む一方で、自分の行動の責任を自覚し続けた、草庵の「自律的で責任ある生き方」について考える。
- 内容項目A（1）では、自分の自由な意思によっておおらかに生きながらも、そこには内から自覚された責任感の支えによって、自ら考え、判断し、実行するという自律性が伴っていることが大切である。

2 資料の読み方のポイント

- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公（草庵）を通して池田草庵の生き方について考える資料であり、草庵の立場で場面を捉えていく。（子どもが「草庵」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 寺にあずけられ、育てられた池田草庵が、仏教の修行のかたわら儒学と出会い、僧侶の道を選ぶのか儒学の道に入っていくのかを苦悩する。その苦悩は、幼い時から育ててもらった恩義を裏切ることや、儒学を学ぼうとするのに「孝」の徳に反することへの苦悩である。

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 『草庵先生』 監修 木南卓一
編集者 八鹿町教育研修所（八鹿町（現 養父市）教育委員会内）
発行者 池田草庵百年祭奉賛会
発行所 八鹿町（現 養父市）教育委員会 1981年
- ・ 『池田草庵先生 一生涯とその精神―』木南卓一 著
発行者 池田草庵百年祭
発行所 記念事業実行委員会 八鹿町（現 養父市）教育委員会内 1976年

○ 池田草庵について

- ・ 幕末に現在の養父市にある宿南に生まれた。
- ・ 草庵の自律の精神は「慎独」という言葉に象徴されている。「慎独」とは、「自分がひとりである時でも心を正しくもち、行いを慎む」ということである。
- ・ 草庵の思想は、「肄業餘稿（いぎようようこう）」という著作にまとめられている。
「理想は高くもち、学問は身近に役立つことを重んじる。（19条）」
「学問をする者は、日常の営みや肉体労働をいやがってはいけない。（93条）」
「たとえ人を欺くことはできても、自分を欺くことはできない」（143条）
「人間が草木と同じように朽ちてしまわないそのわけは何であろうか。それは徳の備わったりっぱな人間となり、そのりっぱさが世にたたえられるようになる点である」（211条）
- ・ そういった草庵の生き方に共鳴した若者達は、切磋琢磨して学んだ。「青谿書院」のトイレが今も残っているが、その戸には、蠟燭の炎のあとが多くある。これは、消灯後、トイレの戸に蠟燭を置き、その明かりで学び続けた塾生の志を象徴している。
- ・ この弟子たちの中から、幕末から明治にかけて日本の屋台骨を背負う人々が現れた。文部大臣となった久保田譲、東京大学総長や文部大臣を歴任した浜尾新、京都府知事となり琵琶湖疎水を造った北垣国道などである。
- ・ 「青谿書院」は現存するが、その庭にもみの木が立っている。当時、門人達が植えたものだという事である。天を目指して高くそびえるこのもみの木は、亡くなっても草庵の志を象徴するものといえる。

4 展開の具体例

わが道を歩む ―池田草庵―

- ・主 題 名 ・自律的な生き方 A (1)
- ・資料の概要 ・僧侶の道の修行中でありながら儒学を深く学びたいという思いが募る草庵は、和尚に願いを申し出るが許されず、世話になった和尚の恩との狭間で苦悩する日々を送り、ついに許しを得ぬまま寺を出る。その後、学問に励みながら和尚の許しを得ようとするが会ってももらえず、「人として和尚様に認められるようになること」を誓い努力を続ける。ついに、和尚に許された草庵は、安堵感の中で、自らの自律的な生き方を新たに誓う。
- ・ね ら い ・和尚の許しを得ないまま寺を出たが、その責任を自覚し続けた草庵の生き方を通して、自由を大切にしながら、自律的で責任ある行動をしようとする道徳的心情を育てる。

展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	あなたには、進みたい「わが道」がありますか。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・ろうそくの炎を見つめる主人公の気持ちを考える。 ・悩んだ末に満福寺を去る時、小走りに駆け出した主人公の気持ちを考える。 ・和尚に詫びに行ったが会ってもらえなかった時の主人公の気持ちを考える。 ・和尚と語り合った後、寺を去る時に深々と頭を下げる主人公の気持ちを考える。	ろうそくのほのおを見つめる日が続いた時、草庵はどんなことを考えていたのでしょうか。 ・京都に行き、相馬九方先生の下で儒学を学び続けたい。 ・儒学の道に入れば、和尚様を裏切ることになる。 ・私はどうすればよいのだろう。 満福寺を去る時、何かを振り切るかのように小走りに駆け出した草庵は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・必ずお許しをいただきにまいります。 ・もう迷わない。儒学の道に入ることを決断したのだ。 「和尚様が会ってくださらないのは、仕方ないことである」とつぶやきながら、草庵はどんなことを考えていたのでしょうか。 ・だまって出た私に会われないのは仕方がないことだ。 ・まだまだ私は未熟だ。 ・自分が選んだ儒学の道でもっと努力して、人として和尚様に認めていただくしかない。 「何も言わんでよい…」とおだやかな笑顔で和尚に声をかけられた草庵は、心の中で何と言ったでしょう。 ・許していただき有難うございます。 ・私の生き方を和尚様に認めていただくことができた。 ・責任ある生き方の大切さを教えていただき有難うございました。
終 末	・自分の考えを書く。	考えたことを道徳ノートを書きましょう。

頼りなくゆれるろうそくの光を見つめる主人公の心のゆれ(迷い)を考えさせる。

迷いを断ち切り、寺を出る決断をした主人公の心を考えさせる。

「人としての責任ある生き方」を問われていると主人公が自覚していることをおさえる。

「人としての責任ある生き方」を認められた安堵感の中で、自律的な生き方について考える主人公の心情の高まりをおさえる。

【p 96～p 99】 甘地の獅子舞

1 資料活用にあたって

- 裕樹さんたちの努力に焦点をあてれば内容項目はA（5）であるが、本資料は裕樹さんたちを支えた「郷土の伝統文化を受け継ごう」という気持ちに焦点をあてて内容項目はC（17）で扱う。
- 内容項目のC（17）では、郷土の伝統文化について、先人の努力を知り、自分もまたそれを継承し発展させていくべき責務があることを自覚し、そのために努めようとする心構えを育てることが大切である。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：ぼく（子どもが「ぼく」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：裕樹さんと真也さんの早がわりの練習に打ち込む姿と二人の話
- 変化するところは：「ぼくは、ただじっと見ているだけだった。」
- ぼくが二人のお兄さんと一体化するプロセスで追うと主人公の心をとらえやすい。

・裕樹さんと真也さんから伝統を守る決意を聞き、何度も練習する二人の姿を見て、ぼくはみんなが帰ってもじっと見るようになる。

・祭りの日には、ぐっと手に力入れ、足にも力が入って、心臓がバクバクする。そして、技が成功するとみんなが拍手をしているのに、ぼくはガッツポーズをする。

3 読み物資料の素材について

【参考URL】

- ・ 伝統芸能一覧（市川町HP内）
<https://www.town.ichikawa.lg.jp/info/304>
- 甘地の獅子舞について
 - ・ 神崎郡市川町甘地（あまじ）の八幡神社と奥の大歳神社の祭礼に奉納される約四百年の歴史がある獅子舞。
 - ・ 1969年（昭和44年）兵庫県重要無形民俗文化財に指定。
 - ・ 祭日は八幡神社では9月の第1日曜日か第2日曜日、大歳神社では体育の日前日の日曜日となっている。
 - ・ 甘地の獅子舞の特色は、全ての曲に「ばやし子」が獅子をはやすことである。
 - ・ 獅子方（獅子の中に入る）は、「ばやし子」を経験した中学生以上の青年になる。
 - ・ 戦後、後継者不足で途切れがちになり、1986年（昭和61年）に地元保存会が結成された。
 - ・ 技の難易度が高い「早替わり」は途絶えたままだったが、その技を知る人が高齢になり、このままだと「早替わり」が消滅してしまう危機感から、技を知る人をお願いして技を継承することになり、2004年（平成16年）、30年ぶりに披露された。
 - ・ 技の継承は、すべて耳で聞き目で見て行われる。技を知る者がアドバイスをしながら進められる。年配の方が吹く笛も楽譜はない。使われる道具も全て手作りである。

4 展開の具体例

甘地の獅子舞

- ・主 題 名 ・地域の伝統文化を受け継ぐ C (17)
- ・資料の概要 ・ある日、獅子舞の「早がわり」に取り組む二人のお兄さんを見たぼくは、二人の取り組む姿に圧倒される。お兄さん達から、懸命な練習を支えるのは「技を受け継ごう」という気持ちであることを知ったぼくは、二人の練習を真剣に見守るようになる。そして、祭りの当日、技を成功させた二人を見つめるぼくは、技を受け継いでいくことを誓う。
- ・ね ら い ・裕樹さんと真也さんの早がわりの練習に打ち込む姿をみて道徳的に変化するぼくを通して、郷土の伝統文化を継承発展させていこうとする道徳的实践意欲を育てる。
- ・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・学習する道徳的価値に興味を持つ。	みなさんの住む地域には、昔から大切に受け継がれてきているものはありますか。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。	
	・一生懸命練習する理由を尋ねる主人公の気持ちを考える。	ぼくはどう思って「なんで裕樹さんは、そんなに一生けん命やってるん。」と尋ねたのでしょうか。 ・肩の上に立つなんてあぶないのに…。 ・こんなに一生懸命やって、しんどいだろうに…。 ・やっていてそんなにおもしろいのかな。
	・練習をただじっと見る主人公の気持ちを考える。	みんなが帰った後も、ただじっと練習を見ていた主人公は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・ぼくにもお兄さんたちの気持ちがわかるよ。 ・お兄さんたち、がんばってよ。
	・技を大成功させたお兄さん達を見たぼくの気持ちを考える。	裕樹さんたちの技が成功した時、ぼくはどうしてガッツポーズをしていたのでしょうか。 ・自分のことのようにどきどきしながら見ていたから。 ・これまでのお兄さんたちの努力をしているから。
終 末	・舞いを終えたお兄さん達を見ている主人公の気持ちを考える。	舞いを終えたお兄さん達を見ながら、ぼくは心の中で何とつぶやいたのでしょうか。 ・ぼくもきっとお兄さんたちのように舞えるようになるぞ。 ・ぼくもきっと獅子舞の技を受け継いでいくぞ。 ・ぼくもきっとこの地域の伝統を受け継ぐぞ。
	・自分の考えを書く。	考えたことを道徳ノートに書きましょう。

主人公は、ただ技の凄さに感心を寄せているだけで、お兄さんたちの気持ちはわかっていないことをおさえる。

お兄さんたちの話と二人の練習姿がきっかけとなり、「地域の伝統文化を受け継ぐ」ことの大切さを主人公が考えはじめ、気持ちが少しずつお兄さんたちと一体化しはじめていることをおさえる。

主人公の心が、お兄さんたちと一体化していることをおさえる。

舞いを終えたお兄さん達を見ている主人公が、「ぼくも地域の伝統文化を継承していこう」という実践意欲を強めていることをおさえる。

【p102～p107】 忘れない夏 ―嘉藤栄吉―

1 資料活用にあたって

- 延長25回裏の試合の状況を教師が説明し、野球用語も適宜解説する。
- 本資料では、嘉藤栄吉さんの挫折感を克服する姿を通して、希望と勇気をもってくじけないで努力する心について考えさせる。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：嘉藤さん(子どもが「嘉藤さん」になって考えられるように発問を工夫する。)
- 変化するきっかけ(助言)は：また頭の上でひびいた竹山部長の言葉「頭を上げろ！胸を張れ！」
- 変化するところは：嘉藤さんは立ち上がりました。

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ きみは「伝説の球児たち」を知っているか！！
明石中一中京商 延長25回 松本 大輔著 神戸新聞総合出版センター
- 未完のスコアブック
 - ・ 東京文京区後樂園にある、「東京ドーム」の一角に「野球体育博物館」がある。ここには、昔の野球道具から世界のホームラン王・王貞治が使用したバットまで野球の歴史上貴重な資料が展示されている。そこに、この延長25回に及んだ「明石中一中京商」のスコアブックがある。しかし、試合を決めた1点が記されておらず空白のままである。公式記録員、広瀬謙三ですらペンを動かすのを忘れた一瞬には、ナインの汗と涙の物語がある。
- 延長25回
 - ・ 現在の高校野球大会規定では、選手の健康を考慮して、延長13回以降は無死1・2塁の状態から行うタイブレーク制度を導入している(決勝を除く)。しかし、そんな規定がなかったこの試合では、20回を超える頃から大会本部が再試合を検討していた。そして、25回が始まる前に、これ以上新しいイニングに入らないことが両軍ベンチに告げられていた。この時点で、明石中の中田投手の投球は、打者91人に対し、被安打7、奪三振10、四死球8、球数は249球だった。
- 嘉藤栄吉さん
 - ・ この試合当時は15歳。身長160cm少しで小柄ながらも、同級生を押しつけレギュラーを獲得していた。もちろんチーム最年少であった。
 - ・ この試合で悲劇の主人公となってしまった嘉藤さんは、「なぜ、私のところに最後のボールが飛んできたのか？」と、何度も自問を繰り返した。グラウンドに戻ったが、自分の責任を忘れたわけではない。答えが出たわけでもない。ただ、「もう一度、仕切り直して、努力するしかない。」と考え、運命の一球と生涯向き合っていく覚悟をした。気持ちの整理がつき、笑顔で振り返れるようになったのは、それからずっと後のことである。
 - ・ 自分の弱さを知った嘉藤さんは、強く生きた。家族の方の話によると、常に自分に厳しい人で、弱音を吐いたことなど全くなかったそうである。講演を頼まれることも多かったが、1時間以上に及ぶ講話の原稿をすべて暗記して当日に備えた。資料にある平成15年の全国高校野球大会兵庫県大会、開幕戦の始球式の前には、自宅近くの公園で、何度も何度も練習してボールを投げ込んだ。そこまでがんばらなくても・・・と感じたことが何度もあったそうである。
- 竹山部長
 - ・ 延長25回戦から2年後の1935年、転勤により明石中を去った。しかし、当時の部員との親交は続いた。竹山先生は、同窓会のたびに、嘉藤さんの顔をのぞき込んで、「8月19日のこと、まだ気にしとるんとかやうか？気にしたらあかんぞ。」と、言った。嘉藤さんが50歳になっても60歳になってもその温かいまなざしは変わらなかったという。この優しさが運命の一球と向き合う嘉藤さんを支えた。

4 展開の具体例

- ・主 題 名 挫折を乗り越えて A (5)
- ・資料の概要 延長 25 回、一点も許されない状況で、一瞬弱気になった自分のミスによりチームを負けさせてしまった嘉藤さんは、自分を責め続けた。家に帰ってからも 3 日間、試合について考え続けた末、「もう一度仕切り直して努力すべきだ」とようやく思えた時、嘉藤さんは、竹山部長の叱咤が心によみがえり、グラウンドに向かってかけ出す勇気がわいてきた。
- ・ね ら い 家に閉じこもり考え続けた嘉藤さんの頭上に響いた「頭をあげろ！胸を晴れ！」という竹山部長の言葉に、道徳的に変化する嘉藤さんを通して、くじけずに希望と勇気を持って前進していこうとする道徳的実践意欲を育てる。

・展開の概要

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	高校野球で「伝説の試合」があったことを知っていますか。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・試合が終わり、顔を上げることができない主人公の気持ちを考える。 ・家に閉じこもった三日間の主人公の気持ちを考える。 ・チームメイトが待つグラウンドに向かって駆け出した主人公の気持ちを考える。	高田監督の言葉かけにも頭を上げることができなかった嘉藤さんは、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・自分のミスで大変なことをしてしまった。 ・どうしたらいいんだ・・・。 ・先輩たちに申し訳ない。お詫びのしようがない。 家に閉じこもって三日間、嘉藤さんはどんなことを考えたのでしょうか。 ・自分のエラーであの大勝負を終わらせてしまった。 ・自分に飛んでこなければこんな思いをしなくてもよかったのに。 ・もう少し 1 塁よりに飛んでいてくれれば私の守備範囲でなく、こんなに苦しなかったのに。 ・もう少し 2 塁寄りに守っていれば、サヨナラヒットで終わり、こんなに苦しなかったのに。 グラウンドに向かって駆けだした時、嘉藤さんは心の中でどんなことを言っていたでしょう。 ・もう一度がんばろう。 ・閉じこもっても何も解決しない。 ・自分の所にボールが飛んできたのは、偶然ではない。自分を磨かなくては。 ・自分の弱さをはねのけて自信を持てるように努力しよう。 ・もう逃げないぞ。
終 末	・「Imagine」を読む。	副読本の 107 ページを読みましょう。

延長 25 回の試合の様子をおさえる。

責任の重大さにどうしたらいいのかわからない主人公の心を考えさせる。

主人公が、自分の失敗を直視する勇気をもてず、挫折感を克服できないことをおさえる。

頭の上でひびいた竹山部長の言葉がきっかけとなり、主人公が「現実を直視し、くじけずに希望と勇気をもって取り組もう」という実践意欲を強めていることをおさえる。

【p 108～p 113】 樽見の大桜

1 資料活用にあたって

- 写真をプロジェクターで拡大して映すなど、資料提示の工夫をすると、子どもたちは共感的に疑似体験しやすく効果的である。
- 内容項目のD（20）では、自然環境と人間とのかかわりから、人間も自然の中で生かされていることを考え、人間と自然や動植物との共存の在り方を積極的に考えることが大切である。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：ぼく（子どもが「ぼく」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：不定根、さん橋についてのおじさんの話
- 変化するところは：目の前の桜が、今までとはまったくちがうもののように見えました。

3 読み物資料の素材について

【参考URL】

- ・ 樽見の大桜の見学（養父市HP内）
<https://www.city.yabu.hyogo.jp/soshiki/kyoikuiinkai/shakaikyoiku/1/4/tarumi/6323.html>
- ・ 樽見の大桜（やぶ市観光協会HP内）
<https://www.yabu-kankou.jp/sightseeing/tarumi-sakura>
- 樽見の大桜について
 - ・ 但馬には桜の名所がたくさんある。その中でも、但馬を代表する立派な桜が「樽見の大桜」である。毎年、一万人もの人々が見学に訪れるという。
 - ・ この桜は養父市大屋町樽見字ケジメ85番地にある。平成18年4月に統合されたが、この桜を校区にもつ口大屋小学校の校歌では「ケジメの山の大桜」と歌い継がれてきた。昭和26年6月9日、「樽見の大ザクラ」という名称で、国指定天然記念物になった。
 - ・ 樹齢は1000年といわれているが、実際の樹齢はわからない。
 - ・ 幹周りは6.3メートル、樹高は13.8メートル、枝張りは東西15メートル、南北21メートルある。
 - ・ 昭和57年頃から衰弱が目立つようになった。そこで、兵庫県樹木医学会が中心となって次の①～⑤の「治療」を始めた。
 - ①幹の中が空洞になっていて、樹木が重量を支えきれないようになってきたので、ジャングルジム形式の支柱で支えた。
 - ②枯れて腐った枝を切った。切らないとそこから腐れが広がるからである。
 - ③土壌改良として、肥料をやった。
 - ④幹の周囲に人が入らないようにするために柵を作った。人が歩くと根を弱め、土が固まることによって、根の呼吸がしにくくなるためである。
 - ⑤もっとも樹勢を回復させた「不定根」である。これは、幹から出る細いひげ根である。ここから新しい養分を吸い上げて木を元気にした。
 - ・ 平成11年に大桜の種を400粒集めて、口大屋小学校で育てることにした。平成13年に子ども達と一緒に20本の桜を植えた。樽見の大ザクラの子どもを、大ザクラの近くに植えたことになる。

4 展開の具体例

- ・主 題 名 ・自然との共存 D (20)
- ・資料の概要 ・延千年の間、桜の花を咲かせている「樽見の大桜」。その桜は、多くの人に支えられていることによって咲き続けている。樹木医である宮田さんと地区のみんなの協力や努力によって、一度は枯れそうになった桜が元気になってきていることを知った主人公は桜が今までと違って見える。
- ・ね ら い ・桜の木を世話する人たちについての話を聞いて道徳的に変化するぼくを通して、自然の偉大さを知り、自然環境を大切にしようとする道徳的实践意欲を育てる。
- ・展開の概要

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	副読本P110の写真（樽見の大桜）を見ましょう。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・満開の大桜の前でおじいさんとたたずむ主人公の気持ちを考える。 ・おじいさんから、たくさんの人の支えがあったことを聞かされた時の主人公の気持ちを考える。 ・おじいさんから不定根や栈橋などの話を聞いた後の主人公の気持ちを考える。 ・植樹を終え、若い桜と大桜を見ている主人公の気持ちを考える。	姿を現した満開の大桜の美しさに息をのみ、しばらくたたずむ ぼくは、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・千年間もこんなに美しい花を咲かせ続けるなんてすごいな。 ・自然の力ってすごいな。 「あの桜は、実はたくさんの人に支えられて、ああしてきれいな花をさかせとるんだで」というおじいさんの話を聞いた時、ぼくはどんなことを思ったのでしょうか。 ・えっ、花は自然に咲いているんじゃないの？ ・人が何を支えてきたのだろう？ 目の前の桜が、今までとはまったくちがうもののように見えた ぼくは、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・それぞれの時代で世話をし続けた人たちがいたからこそ、こうして美しい花を咲かせているんだな。 ・この木を愛した人たちの思いが、木につまっているんだな。 ・この木のすごい力と人々の努力がひとつになって、きれいな花が咲いているんだな。 植樹を終え、今植えた若い桜とつばみをたくさんもった大桜をいつまでも見ていた ぼくは、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・桜の命が受け継がれていくんだな。 ・世話をし続けた人たちの思いを今度は僕たちが支える番だ。 ・ぼくたちの子どもや孫にもこの美しい桜をみせたいな。
終 末	・自分の考えを書く。	自分の考えを道徳ノートに書きましょう。

主人公が大桜の前にして、「自然の偉大さ」については意識していることをおさえる。

大桜と人間とのかかりについて、主人公が興味を持ち始めていることをおさえる。

不定根や栈橋についてのおじいさんの話がきっかけとなり、主人公に「人間と自然との共存」という意識が起きていることをおさえる。

若い桜と大桜を見ている主人公が、「自分も大桜を未来に残せるよう守っていこう」という自然環境を大切にする実践意欲を強めていることをおさえる。

【p 116～p 121】 龍馬がのこしたもの ―坂本龍馬―

1 資料活用にあたって

- 長文のため事前に読ませておく。
- 使用する学年段階に応じて、幕末の時代について教師が簡単に説明する。
- 116ページ～117ページの16行目までは、美和子がすすめられて坂本龍馬のことを調べることになった経緯について教師が要点を説明し、117ページ17行目から発問構成する進め方もある。
- 本資料では、龍馬の国の将来を思う心に気づく美和子を通して、国を愛する心（内容項目C（17））について考える。
- 内容項目C（17）における愛国心の扱いについては、郷土を愛する心が日本全体に開かれたものへと発展し、国を愛する心が児童の内面から自覚されることが大切である。本資料では、「龍馬と神戸のかかわり」を考えていた美和子の視点が、桃々の話をきっかけとして「日本を思う龍馬」に広がることにも着目させたい。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：美和子
- 変化するきっかけ（助言）は：「もしもよ、龍馬が今の美和たちと出会ったら、何て言うかしら。」
- 変化するところは：「桃々姉ちゃん、なんだか、わかるような気がする。」
- ※ 変化するきっかけとなった桃々の問いかけは、美和子に「日本のことを思う龍馬の心をもっとわからせよう」という意図があり、美和子はその問いかけを考えることを通して龍馬の心を深く理解する。

3 読み物資料の素材について

【参考URL】

- ・ 高知県立坂本龍馬記念館
<http://www.ryoma-kinenkan.jp/>

○ 坂本龍馬と神戸海軍操練所

1862年	10月頃	勝海舟を訪問し、その場で弟子入りする
1863年	5月16日	神戸の海軍塾創設のため、勝の使者として越前福井へ向かう。
	10月	海軍塾塾頭になる
1864年	10月	神戸海軍操練所が事実上閉鎖。龍馬らは薩摩の庇護を受ける

- ・ 1863年（文久3年）、鎖国政策の崩壊により海防の必要性が高まっていた折、勝海舟は神戸に海軍操練所の設立を提案した。これは海軍兵学校と海軍機関学校を兼ねたものであり、日本に欧米と肩を並べる海軍を建設するための足がかりを作ろうとした。翌年の1864年（元治元年）から勝は生徒の募集をはじめが、幕府に反対する者でも入所を認めたことが問題となり、わずか1年で操練所は閉鎖されてしまった。
- ・ 操練所の開所期間は非常に短かったものの、その間に坂本龍馬・陸奥宗光（むつむねみつ）など新しい時代を担う人々を育て、日本の海軍の歴史にも大きな足跡を残した。
- ・ 勝海舟の海軍塾の塾頭になった龍馬は、その後、海軍塾や海軍操練所で身につけた航海術をいかして、長崎に商業と海運業の仕事をする会社「亀山社中（のちの海援隊）」をつくった。
- ・ 海軍操練所跡は現在の中央区新港町にあり、錨（いかり）の形をした記念碑が建っている。

4 展開の具体例

龍馬がのこしたもの ―坂本龍馬―

- ・主 題 名 国を愛する心 C (17)
- ・資料の概要 美和子は、夏休みの宿題で調べる「神戸に関係のある歴史上の人物」として、いとこの桃々から坂本龍馬を薦められる。最初、あまり乗り気がしない美和子であったが、父から話を聞いたり本で調べるうちに、龍馬の世界観や国を思う気持ちに共感し始める。そして、桃々から、龍馬の思いが多くの人たちに受け継がれていたことを聞かされた美和子は、自分たちもこの国の将来を託されていることを自覚し始める。
- ・ね ら い 龍馬の国を思う心を知り、道徳的に変化する美和子を通して、我が国の発展に尽くした先人の努力を知り、国を愛する道徳的心情を育てる。

展開の概要

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	坂本龍馬についてどんなことを知っていますか。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・「この国を洗濯してみせる」という龍馬の言葉を見つけた時の主人公の気持ちを考える。 ・桃々から龍馬についての話を聞いた時の主人公の気持ちを考える。 ・桃々の問いかけの答えがわかった時の主人公の気持ちを考える。 ・桃々と顔を見合せて笑う主人公の気持ちを考える。	本を読み返し、「この国を洗濯してみせる」という龍馬の言葉を見つけた美和子は、どんなことを思ったのでしょうか。 ・洗濯ってどういうこと。 ・日本の国に対して熱い思いをもっていたんだね。 「日本をなんとかしなきゃ」という龍馬の思いを桃々から聞いた時、美和子はどんなことを思ったのでしょうか。 ・龍馬は日本の国を愛して、新しい日本を夢見ていたんだな。 ・沖田総司もかっこいいけど、龍馬の生き方もかっこいいな。 「桃々姉ちゃん、なんだか、わかるような気がする…」と言った時、美和子はどんなことを考えたのでしょうか。 ・「この神戸で夢見ていた国に近づいているかね。」と龍馬さんは語りかけているんだ。 ・「君たちは日本の将来のことを考えてくれますか。」と龍馬さんは語りかけているんだ。 桃々と顔を見合せて笑った美和子は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・自分たちの国のことをしっかりと考えていかなくては。 ・日本の将来を真剣に考えていた龍馬さんの熱い思いを、私たちも受け継いでいかなくては。
終 末	・自分の考えを書く。	自分の考えを道徳ノートに書きましょう。

「この国を洗濯してみせる」という言葉から、龍馬が世界の中の日本を視野に入れて行動していたことに主人公が注目していることをおさえる。

龍馬の思いを知った主人公に日本の国のことを思う意識が起こっていることをおさえる。

桃々の問いかけに対して、宗光の気持ちを想像することを通して、龍馬の「日本の国のことを思う」心を主人公が理解していることをおさえる。

龍馬の国を愛する心に思いを馳せる主人公が、日本の国のことを思う心情を高めていることをおさえる。

「メッセージ」の活用について

この副読本に掲載している「メッセージ」は、他の読み物資料のように道徳科で中心資料として扱うことも可能であるが、その他の学校における教育活動での活用や、家庭において親子で話しあう機会とするなど、各校において工夫した多様な活用が考えられる。

1 「メッセージ」の趣旨

この副読本は、郷土に誇りを持ち、人と人とのつながりや社会の中での自己の責任や義務、役割を自覚するなど、自己の生き方のよりどころとなるような子どもの心に響く魅力あるものとなるように願って作成している。

そこで、兵庫にゆかりのある方々が、これまでの人生において心を動かされたあるいは揺さぶられた体験、生き方の支えになっている体験等をもとに、地域の先輩として、人生の先輩として、兵庫の子どもたちに伝えたいことや願いを以下 **2 で示す大切にしたい内容**を踏まえたメッセージとして掲載している。

2 「メッセージ」で大切にしたい内容

大切にしたい項目	内 容（小学校）
自他の生命を尊重する心	生命の大切さに関するものであり、生命あるすべてをかけがえないものとして尊重し、大切にする児童を育てる。
ルール・公德心（規範意識）	児童が生活する上で必要とされる社会規範を守るとともに、公德心をもち、それらの精神を日々の生活の中に生かしていく児童を育てる。
礼儀	他の人とのかかわりにおける習慣の形成に関するものであり、状況をわきまえて心のこもった適切な礼儀正しい行為ができる児童を育てる。
自由と責任	自由を大切にするとともに、それに伴う自律性や責任を大切にする児童を育てる。
勤労	仕事に対して誇りや喜びをもち、働くことの意義を自覚し、進んで社会に役立とうとする心をもった児童を育てる。
他人を思いやる心	他の人に接するときの基本的姿勢に関するものであり、相手に対する思いやりや親切な心をもち実践のできる児童を育てる。
郷土を愛する心	郷土とのかかわりに関するものであり、郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもった児童を育てる。
国際理解	国際理解と親善の心をもった児童を育てる。
家族を愛する心	家族集団とのかかわりに関するものであり、家族や家庭を愛する心をもった児童を育てる。

3 多様な場面での子どもの活用とそれを促す工夫

(1) 学校や家庭の日常生活の中で子どもが活用する

子どもが学校や家庭の日常生活の中で活用する。例えば、学校においては朝の会・帰りの会や読書タイムなどで、また、休み時間や放課後などの自由な時間での活用が考えられる。さらに、家庭においても、子どもが自由に活用したり、家族と話題にしたりすることが期待される。そのために、例えば、日にちを決めて持ち帰る時間を設定したり、長期休業中の活用を促したりするなど、家族と話題にしたり、保護者がメッセージを活用し、子どもに助言したりすることなどが考えられる。

(2) 道徳科で活用する

道徳科の教材として「メッセージ」を活用することもできる。ただ、道徳科においては補助的な資料として用いることが多いと考えられるが、指導計画に位置づけて生かすことも考えられる。

道徳科においては、例えば、次のような場面で活用することが考えられる。

- ①展開段階の中心的な資料として、ある内容項目に関する学習に生かし、内容を深める。
- ②終末段階の題材として、学習したことの明確化を図るために用いる。
- ③導入段階の題材として、道徳的価値に関心を持たせる。

(3) 総合的な学習の時間の動機付けや自己の生き方を考える際などに活用する

総合的な学習の時間においても活用することができる。子どもが興味・関心を大切にし、自ら課題を見つけ、探究的な見方・考え方を働かせ、自己の生き方についての考えを深める体験的、問題解決的な学習を行う際、「メッセージ」を課題を見つけるヒントにしたり、体験的な学習への動機付けとしたりして役立てることができる。

(4) 特別活動の各内容と関連させて活用する

特別活動の、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事においても活用することができる。小学校においては、例えば、学級活動(3)、とりわけ「現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成」や「社会参画意識の醸成や働くことへの意義の理解」にかかわる指導などで生かすことができる。また、学級活動(1)においても、協力して楽しい学級や学校の生活づくりに参画する自主的な取組などの中で活用することができる。さらに、学校行事においては、例えば、様々な活動の事前指導や事後に体験したことを振り返り、まとめたり、発表し合ったりする活動、動機付けを図る際の題材などとして生かすこともできる。

なお、学級活動(1)などの子どもの自発的、自治的な実践が中心となる活動においては、教師が助言等で補助的に用いるなどして、子どもの自主的、実践的な態度がはぐくまれるよう配慮することが大切である。

(5) 家庭や地域との連携

「メッセージ」は、大人が読んでも心に響き、生き方を考えることのできる内容である。学校で、家庭で、また地域社会などで子どもと一緒に話し合い、子ども理解を深める題材とすることができる。各校においては、学年通信や保護者会などで紹介し、学校と家庭が連携した道徳教育の推進に活用できる。例えば、教師、保護者、地域の人々による懇談会などで道徳教育について話題にすると、時、「メッセージ」の内容を提示することによって、道徳教育への共通理解を深めることができる。また、道徳科の公開授業での活用、各種通信や地域掲示板などでの活用等によって、連携を具体化させることができる。